写真：日本人の日々の楽しみ

カメラ付き携帯電話やデジタルカメラの出現で、写真がぐっと身近になりました。

手軽な表現手段として、日常を写真に撮る人が増えています。

フィルムからデジタルへ

写真といえば、まずフィルムを買って、撮影し、撮影済みフィルムを写真店やコンビニに持ち込み、現像してもらい、ネガと紙焼き写真を受け取るという流れが、これまでは一般的でした。しかし現在では、デジタルカメラで撮影した後、データをパソコンに保存して、必要な写真だけを家庭用プリンターで印刷することが多くなっています。街の写真店は次々と姿を消し、今や写真といえば、フィルムに焼きつけるものではなく、メモリーにデータとして保存されるものになりつつあるのです。

内閣府の「主要耐久消費財等の普及率に関する調査(2007年3月末現在)」によると、日本全国の約4,780万世帯の内、58.9%がデジタルカメラを保有しています。また、デジタルカメラに不可欠なパソコンの普及率は71.0%にのぼっています。

日本国内におけるデジタルカメラの価格は3～5万円程度で、フィルム1本の購入代と同時プリント代で約1,500～2,000円の費用がかかることを考えるとそれほど高価なものではありません。手ブレ補正機能や人間の顔を判別してピントや露出を合わせる機能などのあるカメラも登場し、誰でも簡単にきれいな写真が撮れるようになりました。

デジタルカメラは、撮影スタイルと撮影後の写真の楽しみ方を大きく変えました。以前は、フィルムを買わなければならなかったうえに、うまく撮れたかどうかわからないフィルムを現像してもらわなければならなかったため、お金も手間もかかりました。しかし、デジタルカメラだと、うまく撮れたかどうかをその場で確認して、撮り直すこともできるし、撮影後は写真を選んでプリントすることができるので、お金も手間もかからないから写真をたくさん撮るようになりました。また、特別な日に限らず、日記のように普段の生活で興味や関心をもったものを気軽に撮るようになりました。

撮影後は、パソコンを使えば簡単に写真を加工できるので、自分で撮った写真を年賀状に使ってみたり、手作りの写真集を編集してみたりと、撮影からプリントまで、すべてを自分の手で好み通りに仕上げることが可能になったのです。

これまで写真にあまり馴染みのなかった人が、気軽に写真を楽しめるようになった点で、デジタルカメラの果たした役割は大きいものがあります。

携帯電話で撮る写真

©北郷仁

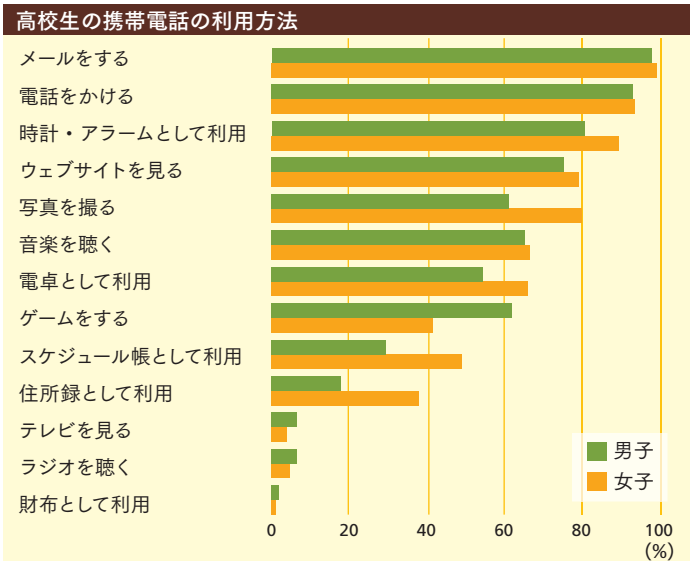
日本における携帯電話の普及率は高く、今や小学生から年配の人まで幅広い層で利用されています。高校生の所有率は9割以上にのぼっています。最近の携帯電話には多くの機能がついており、利用方法としては多くの高校生が、本来の「電話をかける」のほか「メールをする」「時計・アラームとして使う」「ウェブサイトをみる」「音楽を聞く」などと並んで「写真をとる」を挙げています。

これまでは、カメラやビデオカメラを持っている人が現場にいなければ撮れなかったような事件や事故の映像が、一般の人の携帯電話で撮影されてニュースなどで流れることも多くなりました。また、旅行や行事など特別な出来事を記録するだけでなく、掲示物をメモする代わりに撮影したり、日記を書く代わりに日々の出来事を撮

携帯電話のカメラで雷門の写真を撮影する人々 ©北郷仁

影してブログなどに掲載したりと、ふだんの生活のなかで写真を撮ることが増えています。

携帯電話で写真を撮る人が増えるにつれ、写真雑誌では携帯電話でうまく写真を撮るための記事が定期的に掲載されたり、携帯電話で撮った写真を対象とする写真コンテストが行われたり、写真集が発行されるようになってきました。また、多くの携帯電話には撮影した写真をメールに添付して送れる機能がついているので、撮影した写真を友だちに送って、友だちと写真を共有することも一段と容易になっています。



グラフ資料：
金融広報中央委員会「子どものくらしとお金に関する調査」

プリクラ

プリクラは「プリント倶楽部*」の略で、人の顔や姿を機械が自動で撮影し、数分後には、その写真が数枚から10数枚のシールのシートになって出てくるというものです。1回300～500円で、フレームや模様をつけたり、書き込みをしたりしてデコレーションすることができます。シールは、自分だけのオリジナルシールとして、いろいろなところに貼って楽しむことができます。

プリクラは、1995年にゲームセンターなどに登場して以来、女子中高生や若い女性を中心に根強い人気を保っています。プリクラ写真を貼る専用の手帳は「プリクラ手帳（略してプリ帳）」と呼ばれており、プリクラ写真のほかに、いろいろなシールを貼ったり、色鉛筆やカラーペンで模様を書き込んだり、そのときの思い出を書き込んだりします。

プリクラの魅力は、友だちと一緒に自由に写真を撮り、遊び感覚で作品にできる楽しさだけではありません。プリクラ写真を共有したり交換したりすることで友だちの証にも、そのときどきの思い出の記録にもなっているのです。プリクラの出現によって、写真もアルバム作りも、ますます身近に、手軽になっているのかもしれません。

プリクラ手帳

* 厳密には「プリント倶楽部」は商標だが、同様の機能を持つ他社製品も一般に「プリクラ」と呼ばれている。

友だちとプリクラを撮ろう！

ゲームセンターのプリクラ

プリクラの画面に触れ、プリクラシールの背景やフレームを選ぶ。

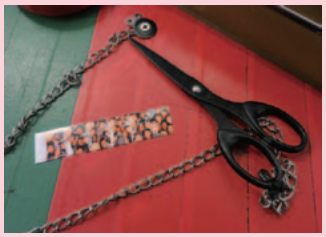
プロ仕様のライトの前に立ってポーズをとる。

撮影が終わったら、プリクラ機とつながっている専用ペンで写真に書き込む。

©北郷仁

専用ペンでいろいろと書き込んだあとの画面。線を引いたり、びっくりマークをつけたり、日にちを書いたり、一緒に撮った友だちへのメッセージやコメントを書き込んだりしたもの。

数分後に出てきたプリクラシール



友だちとプリクラシールを分けるためにはさみが用意されている。

注目を集める若手写真家　梅 佳代さん！

デジカメや携帯電話のカメラ機能などが普及し、日々の生活の中で、面白いこと、楽しいこと、めずらしいものを発見した時に、すかさず写真を撮る人は増えています。写真が身近で、日々の大きな楽しみになっている今の日本で、梅佳代さんの写真が人気を集めています。

梅佳代さん（1981年生まれ）は、誰もがどこかで目にしている(はずの)決定的瞬間を撮ることができる写真家です。彼女の写真を見ていると、まるで自分がその場所にいるかのような錯覚を覚えます。可笑しさ、懐かしさ、そして自分自身の大切な思い出、実に様々な気持ちが湧き上がってきます。小手先のテクニックや演出で撮影された写真にはない、躍動感に満ちた輝きが、彼女の写真にはあふれています。

2006年に出版された、はじめての写真集『うめめ』は、写真集としては異例の11万部（2008年3月現在）の売上を記録し、2007年には第32回木村伊兵衛写真賞*を受賞しました。また、

『うめめ』　リトルモア刊
© 梅佳代

彼女が写真専門学校生として大阪に住んでいた際に撮りためた、近所に住む小学生の男の子たちを撮った写真をまとめて出版した『男子』も4万部の売上を記録するなど、大きな話題となっています。東京、パリ、ロンドン、バンコクでの写真展でも高い評価を受け、新聞、雑誌、テレビなど多方面で話題を集めています。

『男子』　リトルモア刊
© 梅佳代

梅佳代さんの写真が人気を集めているのは、自分でも撮れそうな「なにげない日常の瞬間」でありながら、自分では絶対に撮れない瞬間を見せてくれるからなのでしょう。

*木村伊兵衛写真賞
戦前・戦後を通じ、日本の写真文化に貢献した写真家・木村伊兵衛（1901-1974）の業績を顕彰して、朝日新聞社により1975年に設立された写真賞。プロ・アマ・年齢を問わず、写真の創作・発表活動において優れた成果をあげた新人に贈られる。同賞の歴代受賞者の多くは、現在も日本を代表する写真家として活躍を続けている。

高校生の写真活動

誰でも気軽に写真を楽しめるようになる一方、全国には約6,000校の高校写真部・サークルがあり、部活動として写真に取り組んでいる高校生もいます。こういった高校生たちのなかには、フィルムを使って撮影し、自分で現像することにこだわっている人も多くいます。このような高校生たちが日頃の活動の成果を発表する場として、学校の文化祭での展示をはじめ、各都道府県の高校文化連盟の写真部門が行うコンテストや、写真雑誌の月例コンテストへの参加があります。

読売新聞主催「よみうり写真大賞」高校生部門

http://www.yomiuri.co.jp/photogp/

よみうり写真大賞は、読売新聞が毎年主催する、プロ、アマを問わず全国の写真愛好家が参加できる写真コンテストです。事件や事故を撮った報道部門をはじめ、テーマ部門、高校生部門、小中学生部門、ファミリー部門に分かれています。

高校生部門には「自由の部」と「フォト＆エッセーの部」があります。「自由の部」は、学校行事や身近な生活を、高校生らしい新鮮な目でとらえた写真が課題となっています。「フォト＆エッセーの部」は、一人の高校生を主人公にして、その姿や撮影者の思いを5枚以内の組み写真と200字程度のメッセージで表現するというものです。これは、TJFが開催し、2007年度に10回をもって終了した「高校生のフォトメッセージコンテスト」を継承するもので、TJFは後援しています。入賞作品の一部は引き続きTJFのウェブサイトや出版物を通じて、海外の高校生に発信していく予定です。

写真甲子園*

http://town.higashikawa.hokkaido.jp/phototown/koshienofficial.htm

写真甲子園は1994年から北海道の東川町という人口8,000人足らずの町で行われている、全国の高校写真部・サークルを対象にした写真の全国大会。東川町は、写真文化によって町づくりをしようという活動を行っており、写真甲子園のほか、国際的な写真賞「東川賞」、国際写真フェスティバル、文化ギャラリーにおける写真展などを行っています。

©写真甲子園 2007

写真甲子園の特徴は、個人ではなく、高校の写真部・サークルなどのチームで参加することであり、1校から1作品しか応募できません。作品のテーマや題材は自由で、4～8枚の組写真で作品を構成することになっています。毎年、全国200校以上の学校が応募し、写真家、雑誌編集者などから構成される審査員により、全国8ブロック別に初戦審査が行われます。初戦を勝ち抜いたブロック代表14校は、選手3名と監督1名の計4名で7月に東川町で開催される本戦大会に参加します。

©写真甲子園 2007

本戦では、各チームは同じカメラを使い、同じエリアで4日間撮影します。各チームは、自分たちが撮った写真をパソコンで確認し、自分たちで決めたテーマにあう写真を指定枚数選び、組写真にして提出します。作品は公開審査会で審査され、得点の高いチームが優勝します。限られた時間内で多くの写真を撮り、作品にまとめるためには、チームワークが大切で、同じ目標に向かって話し合い、さまざまな課題を乗り越えて作品をつくるというプロセスを経て、参加者は成長していくのです。

また、本戦の運営においては、地元の高校生、お母さんや町民スタッフ、かつて参加者として活躍したOBOGなどによるサポートも大きな写真甲子園運営の原動力となっています。審査員や他校の参加者のみならず、こうした地元の人々との出会いも写真甲子園の魅力の一つかもしれません。

本戦の模様はテレビでも放映され、漫画の題材として取り上げられたこともあります。参加者が、写真をとおして仲間や自分と向き合い、成長していく姿は、多くの人たちに感動を与えています。

*「甲子園」
兵庫県にある野球場。プロ野球の試合のほか、全国高等学校野球選手権大会、選抜高等学校野球大会が毎年開催される。このことから、「甲子園」という単語は、これらの大会そのものを指すこともあり、高校生球児の憧れの地である。これから転じて、野球以外、特に文科系の高校単位で参加する全国規模の大会の名称として使用されることもある（マンガ甲子園、ダンス甲子園など）。

©写真甲子園 2007

写真と向き合った3年間

みどりんぐ
大学1年生、18歳、大阪
＊取材当時は高校3年生

高校で撮影研究部に入って写真を始めたころ、部長のよっさんを含む3年生のチームが写真甲子園[*1]の予選を通過し、夏に開かれる本戦に進んだ。写真甲子園のことを話すよっさんたちがきらきら輝いて見えた。よっさんたちは被写体の人への接し方もうまいし、写真もすごい。その理由を撮影研究部の顧問の花畑先生に聞いたら、「写真甲子園を経験してきた違い。1年生とは、人間的な幅の広さも深さも違う」と言われた。普通の高校生は自分の身の回りのことしか考えていない。でも、よっさんたちは写真甲子園の予選に応募する写真を撮るために、毎日、撮影に出かけ、写真をとおして学校以外の人や世界に触れていた。自分も、次の写真甲子園には絶対、参加したいと思った。だから、1年生が終わり、次の写真甲子園の準備が始まるとき、迷わず参加を決めた。

よっさん（右）

なにをどう撮ればいいんだろう・・・

毎日、毎日、出かけて写真を撮った。でも、花畑先生や先輩たちに見せると、「これじゃ写真甲子園の本選には行けない。真っ正面からドカーンと被写体に向きあってるだけ。その撮影に対する気持ちはいいけど、もっと背景を入れたり、いろいろなカットやアングルを混ぜたほうがいい。技術が足りない」と言われる。何をどう撮ったらいいのかわからなくなって、ちょっとしんどかった[*2]。それでも、毎日、撮影に出かけるうちに、少しずつ技術が身についてきた。それまでは、知らない人にうまく話しかけられなくて人の写真はあまり撮らなかったけど、人の写真を撮れるようになっていた。でも、結局、予選を通過することはできなかった。

このあと、みんなに写真がうまくなったと言われることが多くなった。でも、わたしにとっては、「うまい」はほめことばではない。「おもしろい」って言われたい。この頃から、あまり写真を撮らなくなった。撮ろうかなと思っても、写真になったところを想像して、「おもしろくないなー」と思って撮らないことが多かった。

2年生の12月に参加したイタリア研修旅行のときに撮った一枚

そんなとき、学校のイタリア研修旅行に参加することになった。2年生の12月だった。花畑先生には、「これは次の写真甲子園の練習。ここでいい写真が撮れなかったら、写真甲子園もだめだ」と言われた。モノクロフィルムを何十本も持って出かけた。7日間の滞在中、風景や人などいろいろなものを撮った。このとき、なんでも撮りたいという気持ちがまたわいてきた。撮った写真も、みんなに「いい」って言われて、自信がついた。「いいって思ったら、撮ればいいんだ」と思えるようになった。

自分の気持ちが自然に入り込んだ写真を撮りたい

翌月、最後の写真甲子園への挑戦が始まった。前回は、先輩たちが中心だったけど、今度は自分たちの力で作品をつくりあげられる。「組み写真の8枚全部、自分の写真で埋めるぞー。わたしの力でみんなを本選に連れてってあげるよー」って気合が入った。みんなで決めたテーマは、たこ焼き[*3]。大阪らしさも出るし、たこ焼きと人との関わりも写せるから。

最初は、道頓堀[*4]で、「元気はつらつ、たこ焼き食べてます」というコンセプトで、「はい、もっと大口を開けてくださーい」、「はい、こっち見てー」と指示を出して、演出した写真を撮っていた。

たこ焼き

あるとき、家の近くの下町のたこ焼き屋で写真を撮った。自然な雰囲気でお店の人と会話をしているうちに、その人の人生もほんの少し

聞くことができた。「何十年もここでたこ焼き屋をやってる」と聞いて、「あー、すごいな。このたこ焼き屋はずーっとここにあって、このおじちゃんもずーっとここで生活してるんだ」と感動した。そのときに撮った写真は、自分のそういう気持ちがすーっと自然に入り込んだ写真だった。自分が撮りたいのはこういう写真だと思った。

自分なにやってんねん！

写真甲子園への挑戦はとにかく苦しい。毎日、毎日、撮影に出かけても、思うような写真はなかなか撮れない。先生や卒業した先輩たちにもさんざんだめだと言われる。そのときは落ち込むけど、とにかく写真を撮らないといけないから、浸っているひまもない。自転車でたこ焼き屋を回りながら、「自分なにやってんねん[*5]」と自分に腹が立って、泣きそうになるのを自分の太ももをバーンバーンってたたいてこらえた。「自分がいちばんがんばらないと！」って自分に喝を入れた。

そんなとき、よっさんが手紙をくれた。「学校が終わったら、撮影に行って、現像して……。そんな毎日になれて、それを続けていたら5月にはうまくなっているし、自然と8枚の写真が組めると思ったら、それは大間違いだよ。なんでたこ焼きを撮りたいと思っているのか、はっきりさせないとだめ。がんばれ！」って、すごく応援してくれた。よっさんは、わたしたちのことを本当によくわかってる、同じ気持ちで考えてくれてると思った。

苦しんで見つけたもの

わたしたちにとってたこ焼きってなんだろうと、ずっと考え続けた。下町のたこ焼き屋を撮るうちに、たこ焼きはただ大阪の名物というだけでなくて、子どもから大人までみんなが食べていて、みんながたこ焼きに対して愛を持ってるんじゃないかと感じるようになった。ある日、たこ焼き屋ののれんにぶらさがって遊んでいる女の子の写真を撮った。お母さんはお店のなかで働いている。女の子はどこか寂しそうに見えた。古いお店のたたずまいも、歴史を感じさせた。見ていていろいろなことを考えさせられる写真で、自分でも納得できる一枚だった。

結局、みんなで選んだ予選の応募作品の8枚のなかに、わたしの写真は一枚も入らなかった。写真甲子園の予選を勝ち抜くために、みんなで話し合って、インパクトのある写真で8枚の組写真をつくろうということになった。そのときの8枚は、みんなでこれしかないって話し合って選んだし、自信作だった。でも、本戦に進むことはできなかった。

写真甲子園に取り組んだ6ヵ月間、本当に苦しくて、しんどい毎日だった。それでも、これに挑戦しなかったら今の自分はなかったと思う。花畑先生のことばが胸に残っている。「『全然撮れない、うーん』って苦しんでいるときは実は階段を登ってるときで、階段を登りきったそのときには自分が変わったのがわかる」。

見た人の想像が広がる写真を撮り続けたい

自分が下町で撮った写真は、自画自賛かもしれないけど、今見ても本当にいいなあと思う。インパクトはないけど、そこにそっとたこ焼きがある雰囲気の写真で、撮ったときの自分の気持ちが伝わる写真だと思う。見ていて、写っている人の人生とか、その場の時間の流れとか、いろいろなことを考えさせられる。

大学では写真を専攻することに決めた。先生たちには高校でも専攻していた美術を専攻するよう勧められたけど、自分が一生かけてやるのは写真だと思うから。写真はその瞬間を切り取って記録するもの。たとえば、戦後のころの家をどれだけ絵で描いても「ふーん」で終わるけど、写真だと「おっ」て思う。それは、そこにリアリティがあるから。わたしも、写真で今の時代を切り取って残したいと思う。見た人の想像力が広がるような写真を撮り続けていきたい。そして、はじめて口にするけれど、将来は写真家になって、自分の作品集を出したい！

写真を撮り始めたばかりのころの作品。この頃は、真正面からドカーンと被写体に向かっていた。花畑先生にも「おもしろいなー。性格が出てる」と言われていた

最後の写真甲子園に取り組んだときに撮った写真。いちばん気に入っている写真の1枚

Notes

*1 写真甲子園
Japanese Culture Now参照。毎年7月に北海道で行われる高校生を対象とした写真の全国大会。全国大会には、各地区の予選を勝ち抜いたチームだけが参加できる。みどりんぐの学校の撮影研究部では、希望者でチームをつくり、毎年1月ごろからテーマづくりを始めて、6月10日の締め切りまでに8枚の組写真にまとめる。

*2 「つらい」の意の関西弁。

*3 小麦粉をだし汁でといたものをボール状に焼いたもの。中に細かく切ったタコが入っている。

*4 道頓堀
大阪市南部の繁華街。飲食店が集中している。